エンターテイメントとしての祝祭空間

——ハロウィン分析を通して見るアメリカ社会——

関　口　英　里

1．はじめに

アメリカにおけるナショナル・ホリデイ，すなわち連邦政府が定める国民の祝日は，元日，独立記念日，感謝祭，クリスマスなど現在1年に10日定められている[1]。この数字のみを考えれば，アメリカの祝日は日本と比較しても決して多いとはいえない。一方，アメリカの民俗学者であり祝祭研究の第一人者であるジャック・サンティノ（Santino, Jack）は，祝祭日（holiday）の範疇を「社会的に認識されている記念日や，歴史的な事象や人物を祝うために設けられた日や一定の期間（聖人の日，感謝祭，クリスマス，ワシントン誕生日など），また新年や季節の変わり目など，ある種の移行を標す日」と定義付けている[2]。

この定義に従えば，連邦政府の法定祝祭以外にも，民衆の生活の中から生まれた世俗的な祝祭や，宗教ごとの多様な祝祭，また州政府によって個々に定められた祝祭など，アメリカの祝祭は数えきれないほど存在することになる。そして法定外の祝祭日の中にはアメリカ文化を捉える上で重要なものが数多く含まれているのである。

そうした数ある祝祭の中にあって，ひときわ異彩を放ちながら多くのアメリカ人に支持され続けているものとして，ハロウィン（Halloween／10月31日）を挙げることができる[3]。ハロウィンは連邦政府の法定休日ではないが，この日には全米各地で様々な関連行事が行われ，アメリカを代表する祝祭の一つとして重要な位置づけを有している。

ハロウィンが他の祝祭と比べて異色の存在となっている要素は幾つか考えら

れる。第一に殆どの祝祭が明るく華やかで喜びに満ち溢れているのに対し，ハロウィンは「異界」や「死」の概念と密接に結びつき，謎に満ちている点であろう。アメリカ人の多くは子供の頃から晩秋の闇，魔女や骸骨の仮装，カボチャちょうちんの明かりに照らされた町全体が醸し出す一種独特な雰囲気を無意識に体験してゆくが[4]，この風変わりな祝祭の背景には，深い意味づけが存在する。

ハロウィンが持つさらに重要な特徴は，その独特のエンターテイメント性にある。地域の共同体行事といったレベルから都市の大規模イベントのレベルに至るまで，ハロウィンにまつわる一連の行事や参加形態は，他に類を見ないユニークな要素を含んでいる。つまりハロウィンはあらゆる意味でそこに関わる人々のインタラクティブな活動を必要とするのである。アメリカの祝祭は総体的に大衆文化や商業主義の発展と相まった娯楽性を有している。しかしその中でもハロウィンは人々を楽しませ，また自分自身も楽しむことが核となる，極めて強いエンターテイメント性を持っている。

こうして様々な特徴を有するハロウィンは，社会状況を反映し，その形態や意義を変化させつつも，人々に長く親しまれている貴重な祝祭でもある。そこで本論文はアメリカ文化を映し出す重要な祝祭であるハロウィンに着目し，アメリカにおけるハロウィンの行事形態や意味作用について，歴史的視点のみならず，文化人類学や民俗学，社会学の立場から考察を行う。時代とともに変化するハロウィンのあり方を検証し，都市エンターテイメントの一端を担う祝祭の役割と現代アメリカ社会の実像を探ってみたい[5]。

2．ハロウィンの歴史

2.1 ヨーロッパにおけるハロウィンの起源

はじめにハロウィンの起源について概観しておきたい[6]。ハロウィンは現在でもアメリカを中心に，アイルランドやイギリスの一部などキリスト教が主流をなす地域で10月31日に行われている祝祭であるが，その起源はキリスト教以前，

古代ケルトの土着宗教であるドルイド教のサムヘイン（Samhain）祭に遡る。

サムヘインとは，ケルトの言葉で「夏の終わり」を意味するが，ケルト人の死の神に対する信仰に由来するサムヘイン祭は，ケルトの新年であった11月1日に行われていた。当時の太陽暦によると，祭りは一般にその当日ではなく前夜に行われ，ケルト人はその聖なる夜を「サマンの前夜祭」と呼んでいた。その夜は現世の門と死後の世界の門が開き，死者の霊が二つの世界を自由に行き来することができるとされており，妖精や亡霊，魔女（しばしば黒猫の姿をとる）が飛来すると信じられていた。そのため，人々は祖霊の供養と悪霊退散を目的として，玄関に生命の象徴である篝火（bonfire）を焚き，収穫した農作物などを供えるという儀式を行っていた。そうした一連の信仰から中世以降，ケルト人の間に異界の霊に変装して家々を回る習慣が生まれたと考えられている。

一方キリスト教会は，ドルイド教の名残りである様々な迷信儀礼[7]を廃止し，ハロウィンをキリスト教の祝祭へ改めようと考えた[8]。そのため9世紀頃になると，当時のローマ法王・グレゴリウス三世は11月1日をキリスト教の諸聖人（All Saints, All Hallows）の功績をたたえる祝日である「万聖節」と定めた。それにより，10月31日はその前夜祭という意味からハロウィン（Halloween: All Hallow's Eve のケルト訛）と呼ばれることとなった。その後11世紀になると，11月2日が「万霊節」と定められ，死者の霊を敬う日とされた。この日，人々は死者のため，ことに煉獄（purgatory）[9]にとどまっている魂（soul）のために祈りを捧げた。こうした魂のためにソウル・ケーキ（soul cake）を求めながら各戸を訪問するのがソウリング（souling）の行事である。

こうしてケルトのサムヘイン祭に起源を持つ習慣はキリスト教の祝祭であるハロウィンとなり，その行事は後にアメリカで「トリック・オア・トリート」（trick or treat）へと発展しつつ，現在まで継承されている。

2.2 アメリカにおけるハロウィンの受容と発展

ハロウィンの伝統と習慣は，植民地時代に大西洋沿岸中部地域から入植したスコットランドや，アイルランドの移民によってアメリカに紹介された。その

後，1840年代のイモ飢饉（potato famine）によって大量のアイルランド移民がボストン港からアメリカ北東部に流入したことを契機として，アイルランドを中心としたハロウィンの習慣がアメリカ社会に浸透することとなった[10]。

19世紀後半になると，ハロウィンの晩には妖精達が悪戯をするというケルトの伝説に従って，青年が馬車を屋根の上に載せたり，納屋を壊したりするという，かなり乱暴な悪戯が行われるようになった。その後20世紀に入ってからは破壊的な若者の悪戯にかわって，幼い子供達によるハロウィン行事が主流になる。つまり子供達が魔女や幽霊や黒猫などに仮装して，菓子をもらうために家々を廻り，菓子をくれない家には悪戯をするという「トリック・オア・トリート」が，アメリカにおけるハロウィンの主要行事となったのである[11]。

またハロウィンのシンボルであるカボチャちょうちんが生まれたのもアメリカである。中世ヨーロッパにおいては，ハロウィンの晩にカブをくり抜き，中にロウソクをいれたランプである「ジャック・オ・ランタン」(jack-o'-lantern)を飾るという習慣があった。これはアイルランドの民話である「酒飲みのジャック」と悪魔の物語に由来する[12]。「ジャック・オ・ランタン」の習慣はアイルランド移民によってアメリカに持ち込まれたが，その際，現地では大カブが栽培されておらず，代わりに南部で広く収穫されていたカボチャが使用されるようになった。現代のヨーロッパではこの「ジャック・オ・ランタン」の習慣が殆ど見られなくなった一方で，アメリカで発祥したカボチャちょうちんがハロウィンのシンボルとして定着している。一般的にハロウィンはアメリカの行事として認識されているが[13]，「ジャック・オ・ランタン」の事例からも，ハロウィンがヨーロッパに起源を持ちつつ，その本流はアメリカに移行していることが理解できる。

現在のイギリスでも，子供が近所の家々を廻って硬貨をもらい歩いたり，花火を打ち上げたりするという，ハロウィンと類似した風習が残っている。しかしこれはむしろハロウィンではなく，11月5日に行われる「ガイ・フォークス・デー」(Guy Fawkes Day)[14]に起源を持つ習慣とされている[15]。

こうして古代ケルトに起源を有するハロウィンの習慣は，アメリカの国民的

祝祭として，途絶えることなく現代に受け継がれているのである。

3．現代アメリカにおけるハロウィン行事：その諸機能と文化的意味作用

次に現代アメリカのハロウィンに関して，行事を担う主体と，その実施形態という側面から概観する。ハロウィンで子供主体の祝祭行事が多数行われる中，若者や大人達のための行事も実施されている。そこで本章においては，アメリカにおける様々なハロウィン行事の実態とその諸機能について考察してゆきたい。また重要な背景として，ハロウィンが持つ文化人類学的な意味作用についても確認する。

3.1　子供達によるハロウィン行事の機能と特徴

20世紀以降，子供達の「トリック・オア・トリート」がアメリカの中心的なハロウィン行事となっている。では，子供達が幽霊や魔女，その他の仮装をして近所の家々を廻り，菓子をくれない家に対しては悪戯をするというこの行事にはどのような儀礼的な意味があるのだろうか。

前章で，ハロウィンは古代ケルト暦の変わり目に行われる祝祭であり「あの世とこの世」を結ぶ扉が開く境界的な時空間であると述べた。そうした背景を持つハロウィンと，行事の主体である子供の役割に関連して，ここで祝祭と儀礼についての文化人類学的な理解を確認しておきたい。

ハロウィンが置かれている儀礼的位置づけは「境界状況」もしくは「過渡性」(liminality) と呼ばれる。これはベルギーの民族学者，アルノルド・ファン・ヘネップ (Arnold van Genep) が古典的研究『通過儀礼』(“Les rites de Passage,” 1909) の中で提唱したものである。また人類学者ヴィクター・ターナー (Turner, Victor) は，1967年出版の *The Forest of Symbols* 所収の論文において，そうした時間的・空間的な境界状況を “betwixt and between” と定義している。

この定義に基づけば，年の変わり目や一日の変わり目などは日常から切り離

された部分であり「こちら側」でも「向こう側」でもない境界上の時空と見なされる。そうした境界状況は，例えば西欧において深夜12時が魔女が飛来する時刻とされるように，危険で統制不能な部分と考えられている。その境界的性格の共通性から，儀礼や宗教，超自然信仰と深い関わりを持っているのである。特にヨーロッパの民間信仰では，10月31日の真夜中には魔力が集合するとされる。これは古来，西洋において季節ごとに一年の暦を四分割し，それぞれの変わり目に境界状況が現れると考えられたことに由来する[16]。

このため，10月31日～11月１日以外にも，例えば４月30日～５月１日の「ワルプルギスの夜」(Walpurgis Night) と呼ばれる境界状況がある。「ワルプルギスの夜」については，ゲーテの『ファウスト』にも描かれており[17]，サンティノは，ハロウィンとワルプルギスの夜における超自然的な観念の出現について，その類似性を指摘している[18]。このように境界状況にあるハロウィンの日には，現世と異界の間を霊魂が往来すると考えられていたのである。

次に境界状況と子供がいかに結びつきを持つのかを考えてみたい。文化人類学的な研究では，子供はしばしば大人とは全く異なった存在，つまり不完全で臨界的（marginal）なものであることが論じられてきた。ハロウィンと子供に共通する，ある種の境界性や霊性，超自然的魔力との関連から「無邪気なものと邪悪なもの，すなわち，子供達と魔女達との間に，奇妙な連合が形成され」[19]ることになる。このような意味から「トリック・オア・トリート」は，子供達が異界を代弁するシンボルとして家々を廻り，大人達が供物としての菓子を与えるという，ハロウィンの起源に基づいた象徴的儀礼なのである。

ハロウィンと子供の儀礼的な連合関係が明らかになったところで，現代アメリカにおいて子供達が「トリック・オア・トリート」を行うことの効用について指摘しておきたい。ハロウィンと「トリック・オア・トリート」の機能に関しては，前掲のサンティノによる研究をはじめとして様々な指摘があるが，おもな機能は以下の通りである。

第一に，「トリック・オア・トリート」が10月の末，野外において，しかも日没後に行われることから，季節・気温の変化を体感するという機能が挙げられ

る。都市化や生活環境の近代化とともに，子供達が日常生活の中で自然に触れ，その変化から微妙な季節感を感じとる機会が減少したのは事実であろう。そのような中，腐り始めた落ち葉を踏みしめて歩き，冷気に，そして時として雪に直接触れることで，秋の終わりと冬の訪れを実感できるのである[20]。子供達の変装モチーフとして一般的な悪魔や魔女は，暗闇や寒さの隠喩であるとアメリカの民俗学者，サイモン・ブロナー（Bronner, Simon J.）は指摘する[21]。人々が敢えてそうしたモチーフに変装する背景には，深層にある畏怖の念をコントロールする機能が働いているのである。

第二の機能は，子供に対する保護者の行動規制の緩和と，子供の日常規範からの解放である。これについてブロナーは，「トリック・オア・トリート」が原則として，保護者の監視なしに子供達だけで行われる点に着目している。また，この日は仮装をすることや，菓子をもらって食べること，さらに悪戯することが大人によって特別に公認されている。そのためハロウィンの「トリック・オア・トリート」は，日常における規範の留保として機能しているのである。

これら二つの機能について，子供達は生活と密接につながりのある行事として今なお，伝統的なハロウィンを必要としており，現代に至るまで，冬の暗く寒い夜に順応するための季節行事に多くを学んできた，とブロナーは述べる。そして彼らはその行事を大人達の統制に対するはけ口として上手に利用してきた事実も指摘する[22]。子供達は行事によって，地域社会への順応と，子供社会の構築の双方を実践してきたといえる。

また，タッド・トレジャ（Tuleja, Tad）は，「トリック・オア・トリート」が持つ第三の機能として，子供達の消費社会に対する予行演習であることを指摘する。彼は「トリック・オア・トリート」の商品経済への取り込みに関して，幾つかの側面から論じている。トレジャはまず，以前は近隣家庭に菓子のお裾分けをするような手作りの行事が，現代の消費社会・商品経済社会において，菓子をもらう側の仮装衣装も，そこで提供される菓子も全て既製品で済まされる傾向にある[23]，とハロウィンの商業化について説明する。

またトレジャは，現代の子供達は「働かざる者食うべからず」という消費社

会の規範を「トリック・オア・トリート」から学ぶとも論じている[24]。子供達は商品経済社会の中で，自分を商品として営業活動をうまく行うことにより，いかに多くの利益を得るかということを学ぶのである[25]。この他にもトレジャは近年，現金をはさむカードが販売され，菓子の代わりに子供達に渡されるようになったことを例に挙げている。その上で，金銭や商品価値が重視される社会においては子供の遊びも資本主義の形態をとる[26]，と結論づけている。つまり消費文化大国アメリカにおいて，祝祭は高度に商業化され，子供のハロウィン行事は今や経済性と象徴性をつなぎ合わせる役割を果たしているのである。

一方，「トリック・オア・トリート」の子供達を迎え入れる家々にとってもハロウィンは特別な意味を持った行事である。ハロウィンには民家の玄関や庭にトウモロコシ人形やカボチャ，リンゴといった農作物とともに，様々な工夫を凝らしたカカシや造形物が飾られる。そうした飾りは，収穫を象徴するとともに，各家庭の個性を表現するための手段であり，独創的な創造物（assembrage）として機能しているとサンティノは指摘する[27]。ハロウィンは変装する子供達のみならず，大人達にも自己表現の場を提供しているといえよう。

子供達を中心としたハロウィンについては以上のように様々な機能が指摘されているが，近年の社会情勢の変化に伴って，その形態も変化している。祝祭にまつわる怪奇的なイメージも影響して，現代アメリカにおけるハロウィン，とくに「トリック・オア・トリート」には，様々な恐怖伝説が存在する。1960年代頃から子供達がもらうお菓子に毒が入れられたり，リンゴに剃刀が忍ばせてあったりするという噂話が広まるようになった。

その後，実際にハロウィンのキャンディーに毒を入れ，父親が自分の子供を殺害するという，俗にいう「キャンディーマン殺人事件」（Candyman Murder）が1973年にテキサスで発生した[28]。また同時期に「悪魔的宗教集団が生け贄として子供を誘拐する」という噂話が広がり始め，1980年代後半にはパニックが発生したこともあった[29]。また，自動車社会の進展に伴って，暗闇で目立たない仮装をした子供が交通事故に遭うケースが多発した[30]。そのため人々の間にハロウィンの安全性を高め，子供を危険から守るべきであるという意識が高まった。

深刻な事態を受けて，近年のハロウィン行事では保護者が同伴したり，昼間にパレードが実施されることも多くなった。また地域の自治体や教会等の団体，あるいはショッピングモールといった商業施設による主催が増加するなど，本来の形態を変化させている[31]。最近の「トリック・オア・トリート」に対する危機管理の一例として，検査体制の強化が挙げられる。地域やショッピングモールのハロウィン行事で，子供達がもらってきた菓子入りバッグの中に危険物が混入されていないかを調べるため，病院の協力を得てレントゲン検査を行うこともあるという[32]。こうして過剰とも思われる安全対策のもとに子供達のハロウィン行事が行われるようになったことは，アメリカの犯罪率増加という深刻な社会問題を浮き彫りにしている。一方で，多くの危険や不安を伴いつつも行事が継続される程，ハロウィンはアメリカ人にとって重要な年中行事であることが理解できよう。

3.2 若者～大人達によるハロウィン行事の一般化とその機能

子供達の「トリック・オア・トリート」が変化しつつある中，もう一つの主流となっているのが若者達によるハロウィン行事である。19世紀のアメリカにおいて，しばしば暴力的でさえある若者達の悪戯（prank）が行われたという事実はすでに述べた。そして現代のアメリカにおいても，屋根の上に馬車が載せられたり，小屋が破壊されたり，また窓に石鹸が塗られたり，玄関先の飾り付けやカボチャちょうちんを壊したりするという，伝統的ともいえる若者達の悪戯が特に郊外や農村部において引き継がれている。他方，都市部の若者達はハロウィン行事に伝統的な意味を付与することに消極的である。彼らはむしろ仮装パーティを開いたり，仮装パレードを行ったりして喧噪的にハロウィンを楽しむ傾向が強い[33]。これら若者のハロウィン行事における共通の特徴は，子供達の「トリック・オア・トリート」に見られるような物品の要求や，贈与行為は伴わないことである。その一方で行事が大規模化し，エンターテイメント性が強まる傾向が指摘できる。

次に，若者達の間で行われているハロウィン行事が持つ機能について考えて

みたい。アメリカの子供達は，その多くが幼児期に親に付き添われながら「トリック・オア・トリート」を行うことで初めてのハロウィンを経験する。その後成長に伴って，保護者ではなく学校や近所の子供達とお菓子をもらいに家々を廻るようになる。さらに成長し青年期を迎えると「トリック・オア・トリート」を卒業して，友人達と様々な悪戯（prank, mischif）をしに出かける。時には仮装パーティや仮装行列に参加してハロウィンを楽しむが，その後，結婚して子供を持つようになると，今度は子供達にお菓子を提供したり，自分の子供を「トリック・オア・トリート」に連れて行くことになる。こうして親としての立場から，新たなハロウィンを経験することになるのである[34]。

こうした観点に立てば，ハロウィンは季節の境界上に位置する通過儀礼としての意味だけではなく，現代アメリカにおいて新たな機能が付加されたことが分かる。つまり一人の人間が子供から大人へと成長する各ステージの境界上で経験する通過儀礼としても，重要な意味を有する行事となったのである。「トリック・オア・トリート」をしなくなり，若者同士でそれまでとは異なった，悪戯や仮装パーティーといった形態のハロウィン行事を行うようになることで，自己の成長や加齢を実感として認識する。いわば若者達は，次なる社会的立場やステージへと移行してゆく重要な通過点をハロウィンにおいて経験しているのである。また子供達のハロウィン同様，若者のハロウィンにも，ストレスや規制に満ちた日常からの解放機能があることは言うまでもない。

若者によるハロウィン行事の隆盛を，子供達の伝統的なハロウィンの衰退と見なすか，現代におけるハロウィン復興の活性剤として評価するか[35]，その見解は様々である。ただしここで重要なのは，行事を担う主体の是非をめぐる議論に拘泥することではないだろう。むしろ着目すべきは，現代において伝統的な通過儀礼が大規模商業化し，エンターテイメント性を強めるようになったという近年の「祭りの変質」についてである。今日，祝祭から本来の宗教性や荘厳さが脱落し，フェスティバル化，イベント化してゆく傾向が指摘されている。しかし，その傾向を生み出しているのは商業資本の消費戦略だけとはいえない。その背景に存在するアメリカ社会の変容や，行事に参加することへの効用を含

めて，更に考察を進めてゆきたい。

3.3 ハロウィンの文化的な意味作用：逆転儀礼のエンターテイメント化

これまで検証したように，現代のハロウィンは子供から大人まで幅広い参加者によって行われる儀礼を含んでいる。そこで特に重要なのは，多様なハロウィン行事には，人々の積極的な祭りへの関与と喧噪的な雰囲気という共通性が備わっている点である。ハロウィンは他の祝祭行事とは異質なエンターテイメント性を有し，人々に広く支持され続けている。その原因は，祭りに伴って生み出される特殊な時空間の雰囲気と人々の連帯感に見出すことができる。こうして考えれば，ハロウィンのエンターテイメント化の背景には，従来指摘されてきたような商業主義的な意図だけではなく，ハロウィンが持つ祝祭特性も作用していると考えるのが妥当であろう。

ハロウィンでは，子供や若者が大人に反抗したり，悪戯を行うことが容認される。このように通常では許容されない行為が一時的に容認され，日常の社会的立場の逆転が起こる状況は「儀礼的逆転」(ritual reversal)[36]，「象徴的逆転」(symbolic reversal)[37]，「構造的逆転」(structural inversion)[38]などと呼ばれる。これは特に通過儀礼を伴う祝祭においてしばしば見られる現象である。儀礼的逆転とは一般的に，「祝祭が表象する反日常的世界の中で，強者が弱者に，その逆に弱者が強者に，または，男性が女性に，その逆に女性が男性に，それぞれ転換するということ」[39]である。既に説明した通り，ハロウィンは一種の通過儀礼であり，境界状況を伴う祝祭である。そのためハロウィンの様々な行事においても儀礼的逆転が生じることとなる。

ハロウィンがエンターテイメント性を伴った儀礼となり得る要因は，「単なる象徴的逆転だけではなく，日常世界の全秩序の留保を伴う点」[40]にあろう。ハロウィンという特別な時空間においては，日常世界の規範が取り払われるだけではない。人々の間にハロウィンにまつわる一連の了解事項が成立しているため[41]，この祝祭のもとに行われる子供や若者の活動は非日常的儀礼として容認され，ある種のエンターテイメント的な時空間の出来事として捉えられる。ハロウィ

ンは，こうしたアメリカの文化的伝統のもとに成り立っている行事なのである。

さらに興味深いのは，逆転儀礼が行われる喧噪的な時空間においては，人々の熱狂に満ちた連帯感としての「コミュニタス」が生起することである。ヴィクター・ターナーは，祝祭が行われる境界状況とコミュニタスの概念[42]に着目し，文化における中心性と周縁性の弁証法的な関わり合いを説いている[43]。逆転儀礼であるハロウィンの境界状況によって創出されるコミュニタスの状況は，たとえそれが一時であっても，全ての社会的枠組みを取り払い，同じ場で祭りを共有する人々の心を高揚させ，一つにする。今日のアメリカ社会では，コミュニティーのつながりの弱化など様々な社会のひずみが表面化し問題となっている。しかしそうした時こそ，人々は祭りが本来持っている効用を求めていると考えられよう。

そしてコミュニタスの高揚感をより一層強化するのが，ハロウィンという祝祭が持つ独特のエンターテイメント性である。装飾や仮装を特徴とする行事形態ゆえに，ハロウィンは，アメリカのエンターテイメント文化を反映する代表的な祝祭として発展してきたともいえる。ハロウィンにはどの時代にあっても，楽しみに満ちあふれた開放感と新たな驚きを人々に与える要素を内包している。その基本には自己を表現すると同時に人を楽しませるという，エンターテイメントの本質が深く根付いていることは言うまでもない。ハロウィンは長い歴史の中で，時代とともにそのあり方を変化させつつ現代に受け継がれてきた。一方で，時代が変わり，祝祭行事の内容が多様化しても，その根底に流れている祭りとエンターテイメントの精神は変わらない。こうした点こそが，他の祝祭や年中行事には見出し難いハロウィンの独創性を生み，人々から支持される理由となっている。

4．ハロウィンをとりまく変化が映す現代アメリカ社会

以上，現代アメリカにおけるハロウィンを様々な側面から捉え，その現状と諸機能，文化的な意味作用について考察を行った。そこで本章ではハロウィン

をとりまく状況の変遷に焦点を当て，今日のアメリカ社会においてハロウィンが担う重要な意味を分析する。更にはそれらが反映しているアメリカ社会の現状について考えてみたい。

4.1 祝祭の商業化

「トリック・オア・トリート」は本来，地域社会における手作りの行事としての意義を有するものであった。1940～60年代にかけて行われていた伝統的なハロウィン行事では，手作りの衣装に身を包んだ子供達が近所の家々を訪ね歩き，住人達は訪れる子供達を部屋に招き入れ，自家製のお菓子を提供する，というのが基本型であった[44]。しかし本来の「トリック・オア・トリート」のあり方は1980年代頃までに大きく変化してしまった。

この頃から菓子をもらい歩く立場の子供達は，市販の現代的な衣装を着るようになる。また，菓子を提供する立場の大人達は，子供達を家に招き入れることも，手作りの菓子でもてなすこともなく，既製のキャンディーやビスケットを玄関先で待つ子供達に手渡すようになった[45]。それは隣人に対する不信感の表れであり，他でもなく都市化に伴って変化した地域社会の結びつきの希薄化をも示しているのである。

それに加えて，現代消費社会における商品経済の隆盛が，手作りのハロウィンを商業主義の枠組みに取り込んでしまったという事実も明らかになってくる。今日，商業資本はプレゼントのお菓子や仮装衣裳，装飾品にいたるまで，こぞってハロウィン関連商品を生産するようになった。参加者は消費者として，手軽で信頼できる既製品を買うようになり，手作りのハロウィンは変化していった。アメリカにおけるハロウィンの市場規模は21世紀を迎えて70億円に達している[46]。またハロウィンには，消費者の約半数が１人平均約40ドル以上の支出をするという統計もある[47]。子供たちにとっても，ハロウィンの楽しさは「手軽に買える」ものとして認識されるようになったと考えられる。

また毒入り菓子伝説とも相まって，子供達には市販の菓子が提供されるようになったが，その結果，子供達にも「しっかりした包装を施した，有名企業製

造による菓子こそが信頼でき，優れたものである」という商業主義の価値観が植え付けられたのである。このほかにも，ハロウィン関連商品が通信販売で盛んに売り出されるようになったり，様々な催しが大規模な商業施設で行われたり[48]するという最近の現象は，まさしく消費拡大を目的とした，企業による年中行事の取り込みを示すものであろう。

一方，近年における若者達のハロウィン行事の隆盛にも，明らかに商業主義の影響と社会的価値観の変化が反映されている。ハロウィンの担い手が子供達から若者達へと拡大し，ハロウィンのもう一つの主流を形成しつつあることはアメリカのジャーナリスト達も指摘している[49]。しかし，この変化を導いているのはやはり商業資本であるといえよう。シルヴィア・グライダー（Glider, Sylvia）も若者のハロウィンと資本主義経済の密接なつながりを指摘しているように[50]，ハロウィンを担う主体の多様化は，商品経済の浸透とリンクしていると考えられるのである。

高度消費社会が成熟する1980年代以降には，大人向けハロウィン商品カタログに「ハロウィン到来，近年急成長の大人のパーティーの時」[51]「高級・精緻な貸衣裳，一晩＄150まで」[52]などという宣伝文句が見られるようになった。また最近でも大人のハロウィン行事の増加と，それが経済に与えるインパクトが注目されている。個人，グループが業者に依頼するハロウィンパーティーの装飾費用は，１件あたり約1200ドルに達するという報告もある[53]。子供達のハロウィン商品に比べ，若者や大人達向けの商品は高額で，商業的価値が大きいことが理解できる。そのような意味においても，ハロウィンはもはや素朴な年中行事に留まらず，子供から大人までを巻き込んだ消費イベントとして拡大を見せていることは事実である。

4.2 「祭りの喧噪」の変質：事故，犯罪，暴力事件の増加

ハロウィンは，若者や大人も参加する一大イベントへと変化，発展している。一方で，近年は度を超した若者のお祭り騒ぎによる事故や，犯罪の多発という新たな問題が発生している点も見逃せない。現代，特に都市部の若者は，ハロ

ウィン行事の範疇を逸脱した悪ふざけ的なお祭り騒ぎに興じる傾向が強まっている[54]。これを，ハロウィンと「ミスチフ・ナイト」(Mischif Night) の相乗効果として捉える見解もある。

アメリカにおいて，ハロウィン前夜の10月30日は「ミスチフ・ナイト」として知られている。「ミスチフ・ナイト」とは，イギリスにおいて古い歴史を有し，当初4月30日に行われていたが，19世紀ごろから11月4日，つまり「ガイ・フォークス・デイ」の前夜に行われる行事となる。これがアメリカに紹介された後，アメリカではハロウィンの前夜祭として認識されるようになった[55]。「ミスチフ・ナイト」では，子供のみならず若者も大人に対して悪ふざけをすることが許されている。従って，ハロウィンがおもに子供の行事となっている一方で，「ミスチフ・ナイト」は古くから若者の行事とみなされる傾向が強かった[56]。また，アメリカの中西部やインディアナ州などではハロウィン自体を「ミスチフ・ナイト」と呼んでいる場合もあり，若者にとってのハロウィン行事と「ミスチフ・ナイト」の悪ふざけとは，殆ど一体化したものといえるだろう[57]。

このような理由から，ハロウィン前夜から当日にかけて，若者達による派手な逸脱行為が多発しているのである。特に近年ではこの悪ふざけが暴力や収奪事件に発展する場合が増加する傾向にある。特に，1980年代から現在に至るまで多くの深刻な犯罪が報告され[58]，しばしば日本の新聞でも報道されている[59]。この事態を日常規範の逆転というハロウィンの儀礼的特徴として容認する意見もある[60]。しかしシルヴィア・グライダーも，年ごとに繰り返される暴力行為に，人々にとって毎年ハロウィンの到来が心配の種となっている[61]と述べているように，若者によるハロウィン関連犯罪は，人々に不安を与える容認し難いものである。祝祭の重要なエンターテイメント性を違法なお祭り騒ぎに変質させぬ為にも，前向きな解決策が講じられるべき問題である。

4.3 自己表現の場へ：都市エンターテイメントとしての“assembrage”

現代都市で行われる若者達のハロウィン行事では，大学や各種団体を中心に，仲間内での仮装パーティや仮装行列が開催されるケースが多い。さらに近年，

都市部の若者が参加するハロウィンパレードは，個人的な娯楽から，地域社会を巻き込み観光経済にも影響を与える組織的なエンターテイメントへ拡大している。特にサンフランシスコ，ワシントンDC，ニューヨークなどの大都市においては，多数の観客を擁する豪華な一大ページェントとして，様々なイベントが行われることで有名である[62]。中でもニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジ（Greenwich Village）におけるパレードは，絢爛な山車やパフォーマンスを伴う大規模な都市の野外エンターテイメントであり，ゲイ・ピープルが多数参加して社会的なアピールを行うことでも知られている。このハロウィンパレードについては，ジャック・クゲルマス（Kugelmass, Jack）の研究において詳細に記録，分析が行われており[63]，都市化にともなう伝統的な地域社会や家族関係の希薄化が，従来の固定的な社会規範の緩和をもたらしていることが指摘されている。さらにクゲルマスは，近年のハロウィン行事の隆盛を，社会の価値観の変化に伴った自己表現の一手段[64]と位置づけている。

戦後の核家族化に始まり，1960年代の対抗文化・若者文化の隆盛，1970年代の新右翼の台頭や，保守的な階級主義への揺り戻し現象を経て，1980年代からは同性愛等の多様な価値観のあり方が，個人のライフスタイル選択の自由と権利として受けとめられるようになった。そうした時代の潮流と連動するように，ハロウィン行事の形態や参加者，表現方法も変化してきたのである。ニューヨークのハロウィン・パレードが，社会的な少数派にとっても自由な自己主張，表現の場としてエンターテイメント化されるようになったのも，その現象を顕著に反映しているといえよう。

そして境界的な場において重要な役割を果たすのが道化（トリックスター）と呼ばれる存在である[65]。ハロウィンという祝祭も，そのパレードの中心的主体となる社会的少数派を含む若者達も，ある意味では文化のマージナルな部分に位置するトリックスター的な役割を果たしている。彼らはハロウィンというエンターテイメント性に富んだ現代の祭りで自己表現を行うとともに，日常社会を活性化しているのである。

また，ハロウィンにおいて人々がアイデンティティーを強調して自己表現す

る行為には，本論文第3章で述べた，家々の“assembrage”に通底するものがあると考えられる。サンティノが“assembrage”と呼ぶ，家の玄関や庭先の個性的な飾り付けなどのハロウィンの装飾は，彼が論じる通り，各家族の自己主張ともいうべき造形物である[66]。こうした理解に立てば，現代都市の大規模エンターテイメントと化したハロウィン行事の参加者達にも，時代とともに変化した“assembrage”を見出すことができよう。つまり，家族や地域社会から独立した都市生活者達の思い思いの仮装による自己表現は，庭先の飾り付けから自分自身の“assembrage”へと進化したものなのである。

ハロウィンに見られるこうした表現形態の変化は，自己を究極のメディアとするエンターテイメント文化の進展を物語る一方で，全てのモノを消費し尽くし，自己イメージの消費へと向かうしかなくなった高度消費社会の姿を象徴しているとも言えるだろう。このように社会を多面的に映し出すハロウィンは，時代を超えてアメリカの消費社会を映し出す重要なエンターテイメント・メディアの一つなのである。

5．おわりに

文化人類学者，レヴィ＝ストロース（Lévi-Strauss, Claude）は，“Le Père Noël supplicié”（*Les Temps Modernes* 1952）において，ハロウィンとクリスマスの関係を興味深く論じている。彼は秋から冬にかけて連続する二祝祭について，カトリック系ラテン諸国が前世紀まで聖ニコラウス祭のみを重視していたのに対し，アメリカなどアングロ・サクソン諸国は，一連の祭りを子供達が死者の役を演じ，大人達から寄進を受けるハロウィンと，大人達が子供の生命力を高めるため，プレゼントを与えるクリスマスに積極的に二分してきた[67]と指摘する。

ハロウィンへのこうした文化的な意味付けは，果たしていかなる効果をもたらすのだろうか。まず明らかなのは，クリスマスに対してハロウィンが根源的に持っている対照性を強調することで，クリスマスの明るさと幸福感が一層際

立つという事実である。アメリカをはじめとするアングロサクソン諸国では，クリスマスの光，再生，大人による贈与といったプラスの諸要素に，ハロウィンの闇，死，子供による寄進の要求といったマイナスの諸要素を対置し，二つの祝祭の関係性に明確なコントラストを与えている。この演出により，クリスマスというキリスト教最大の祝祭に向かって盛り上がってゆく，生活のリズムと精神の方向性をもたらすことが可能になる。

他方，この対照化はハロウィンやクリスマスがアメリカにおいて，それぞれ独自の発展を見せたこととも無関係ではないと考えられる。そしてその発展が祝祭本来の宗教的，儀礼的側面以上に，消費文化的な側面で顕著に見られる点が重要であろう。つまり消費をキーワードに両者の関係性を捉えれば，異なる性質を持つ二つの祝祭がアメリカの消費文化に取り込まれ，役割分担を行うことで，市場の活性化に相乗効果をもたらしていることが分かる。今やアメリカにおけるクリスマスは一年で最も大規模な贈答消費が見込まれる機会である。一方ハロウィンは，アメリカ文化を象徴するエンターテイメント性を誇る消費イベントとして，クリスマスにピークを迎える秋冬期の祝祭的雰囲気や消費マインドを活性化する起爆剤となっているのである。

もちろん，ハロウィンとクリスマスのこうした補完関係は現代の消費文化の進展に伴って機能してきたものである。しかし，祝祭本来の儀礼的な意義が商業主義によって完全に骨抜きにされるわけではない。また，ハロウィンのエンターテイメント性は，行事の大規模な商業化に繋がるケースばかりではない。それは人々のアイデンティティー表現の一手段として，大切に培われている慣習なのである。こうしてアメリカ最大の祝祭であるクリスマスとの関係から考えても，ハロウィンはアメリカ文化において重要な役割を担っていることが分かる。

アメリカ人はどの時代にあっても，子供から大人まで，ハロウィンと密接に関わり，その重要性を体感しながら慣習を大切に受け継いできた。彼らはハロウィンの行事を通して様々な効用を得，多くの体験学習を行ってきたのである。ハロウィンのあり方は時代や社会とともに変化するものであり，良きにつけ悪

しきにつけ，祝祭という時空間を通して世相を反映するメディアでもある。ハロウィンが一つのメディアである以上，その時空間を媒介して，人々は常に何らかの文化的メッセージを発信し続ける。そしてまた，そのメッセージを受け取る人々によって更に新たなメッセージが付加されてゆくのである。その際に重要な役割を果たすのが，ハロウィンに不可欠な表現形式としてのエンターテイメント性であることは言うまでもない。

エンターテイメントとは，他者に愉しみを与えることに留まらず，自己のアイデンティティーを表現することでもある。ハロウィンとは，常に新鮮な驚きと感動で人々を巻き込みつつ，それを担う人々とともに進化し続けるインタラクティブなエンターテイメント・メディアなのである。サンティノは，祝祭を完全かつ正確に研究するためには，祝祭を人間活動のダイナミックなプロセスとして捉えるとともに，伝統的なシンボルや行事を定期的に再編することによって，人々がいかに祝祭を創造してきたかという事実に注目する必要がある[68]，と指摘している。その言葉通り，アメリカ社会と連動して変化し続けるエンターテイメント・メディアとしてのハロウィンの姿を今後も注意深く見つめてゆく必要があろう。

〈本文注〉

(1) 1965年以降，ワシントンDC，メリーランド州とバージニア州の一部で4年ごとに1回（大統領選挙当選の翌年），法定休日とされる1月20日の「大統領就任式の日」(Inauguration Day) は，ここでは含めていない。

(2) Jack Santino, *All Around The Year* (Urbana: University of Illinois Press, 1994), xviii.

(3) Santino, *All Around The Year*, xvi.

(4) ハロウィンをモチーフとした代表的な小説の一節でも，ハロウィンにまつわる漠然とした謎や畏怖の念が以下のように象徴的に語られている；「ハロウィーンとは何だろう？どんなふうに始まったのか？どこで？なぜ？何のために？魔女，猫，ミイラの塵，幽霊。すべてがあの国にあるのだ，行ったが最後だれひとり帰ることのできないあの国に」レイ・ブラッドベリ 伊藤典夫訳『ハロウィーンがやってきた』（晶文社，1975年）45，[Ray Bradbury, *The Halloween Tree* (New York: Bantam Books, 1974)]

(5) 本論文において研究対象となるアメリカのハロウィン及びそれにまつわる行事は，おもにアメリカ北東部において行われ，記述されているものとする。Hennig Cohen and Tristram Potter Coffin, eds., *Folklore of American Holidays* (Detroit: Gale, 1987) のハロウィンに関する説明項目において，ハロウィンはアメリカの国民的祝祭であるにも拘わらず，アメリカにおけるほとんどのハロウィンの行事や，それらにまつわる資料はアメリカ北東部のものである，という事実が示されていることによる。

(6) 本章におけるハロウィンの歴史的起源に関する記述は，バーバラ・ウォーカー編，山下主一郎主幹訳『神話伝承辞典』(大修館書店, 1988年)；『世界大百科事典』vol. 12 (平凡社 1988)，山折哲雄監修『世界宗教大事典』(平凡社 1991)；*International Edition* 13 (New York: Glolier, 1985)；*Encyclopedic Dictionary of Religion* (Wahington: Corpus Publications, 1979) における「ハロウィン」(Halloween) の項目を参考にまとめたものである。

(7) ウォーカー，『神話伝承辞典』，211。

(8) 10月31日の晩には，この他にも様々なケルトの儀式が行われ，クルミなどの堅果の殻を燃やした灰や魔女の鏡を用いて未来を予言したりするなどの儀式が展開されたという。今日でも若い娘がハロウィンの晩に鏡の前でリンゴの皮をむくと，鏡には将来の夫の姿が映るという伝説や，桶の水に浮かべたリンゴを何回でくわえられたか，という回数で恋愛の成就を占う「アップル・ボビング」(apple bobbing) の伝説が存在している。これらの儀式については，加藤恭子・山田敏子訳『ヨーロッパの祝祭典』(原書房, 1986年) [Madeleine Cosman, *Medieval Holidays and Festivals*. New York: Susan P. Urstadt, 1981]，173-85. に詳しい。

(9) 天国と地獄の中間で，天国に受け入れられなかった魂たちが一定期間の修練の後に清められ，高められて，天国への日を待つ場所。(『世界大百科事典』23，251.)

(10) Santino, *All Around The Year*, 153.

(11) *The Encyclopedia Americana* 13, 725.

(12) タッド・トレジャ　北村弘文訳『アメリカ風俗・慣習・伝統事典』(北星堂書店, 1992年) 275-6. [Tad Tuleja, *Curious Customs*, (New York: Stonesong Press, Inc., 1987)] によれば，酒飲みのジャックは幾度となく悪魔に命を狙われ，地獄へ連れ去られそうになる。その度にジャックはとっさの悪知恵で悪魔をだまし，自分を地獄へは落とさないという約束をもとりつけて難を逃れていたが，結局は寿命で死んでしまう。ジャックは生前の悪行のため天国に行くことは許されず，しかし，悪魔との約束から地獄へも行くことが出来なかったため，悪魔にさすらいのケルト系ユダヤ人になるように宣告される。ジャックは悪魔に懇願して，地獄の燃え盛る石炭をもらい，それを自分が食べていたカブに入れて，暗闇の道標とした。

この提灯が「ジャック・オ・ランタン」である。

(13) 1997年9月下旬から10月中旬にかけて，大阪，神戸などを中心とした関西地区の国立大学，私立大学，私立女子大学，私立女子短期大学において『年中行事・外来祝祭に関するアンケート』と題する調査を実施した。調査対象は各学部から無作為に抽出された18歳から22歳までの学生247人（男性：84名，女性：163名）である。調査結果では，ハロウィンの起源を「アメリカ」とする回答が73.7%と圧倒的多数であり，現代日本の多くの若者がハロウィンをアメリカの祝祭として認識しているという結果が出ている。

(14) 「ガイ・フォークス・デー」の起源は，1605年，当時の国王であったジェームズ一世と議会から差別的待遇を受け，不満を募らせていたカトリック教徒たちが，国王の暗殺と議会爆破を企てた「火薬陰謀事件」（Gun Powder Plot）に由来する。しかし，この計画は事前に露見し，その首謀者とされたガイ・フォークス（1570-1606）が大逆罪により処刑された。これを記念して街頭で大きな篝火を燃やし，ガイ・フォークスを型どったわら人形に花火を仕掛けて火中に投じ，陰謀の失敗と国王の無事を祝う習俗が行われるようになったのである。現代でも，子供たちはこの日の準備のために「ペニー・フォー・ガイ」（Penny for Guy：「ガイのために1ペニーの寄付を」）と言いながら募金活動を行う。以上の詳細については，Santino, *All Around the Year* 164-5. などを参照のこと。

(15) この事実に関しては，以下の通り多くの研究者が「ガイ・フォークス・デー」にハロウィンの要素が混合されたものとの見解を示している［Tad Tuleja, "Trick or Treat: Pre-Texts and Contexts." in Jack Santino (ed), *Halloween and Other Festivals of Death and Life*, Knoxville: University of Tennessee Press, 86.］など。

(16) Donald J. Ward, "Halloween: An Ancient Feast of the Dead That Will Not Die," *Folklore Mythology* 1 (1981), 1-6.

(17) フリードリッヒ・ゲーテ　相良守峯訳『ファウスト』第一部（岩波書店，1958年），273-99。［Freidrich Goethe, *Faust*. 1831］

(18) Santino, *All Around The Year*, xix.

(19) ヴィクター・ターナー　梶原景昭訳『象徴と社会』（紀伊国屋書店，1981年），261 [Victor W. Turner, *Dramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society*, New York: Cornell University Press, 1974]

(20) Jack Santino, ed. *Halloween and Other Festivals of Death and Life* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1994), 145.

(21) "Halloween is Children's Own Very Special Holiday" *Lock Haven Express*, October 31, 1991.

(22) Simon J. Bronner, *American Children's Folklore*, (Little Rock: August House, 1988),

35

(23) Tuleja, "Tric or Treat," 93.

(24) Tuleja, "Tric or Treat, 94.

(25) この点に関連して，儀礼が「生計を立てる」ことの象徴的実習であること，子供たちは自分自身を商品として売り込み，お菓子をもらうために仲間より目立とうと躍起になっていることなどが指摘されている。詳細は以下の文献を参照のこと；Ervin Beck, "Trickster on the Threshold: an Interpretation of Children's Autumn Traditions," *Folklore*, 96 (1985), 26., John McDowell, "Halloween Costuming among Young Adults in Bloomington, Indiana: A Local Exotic," *Indiana Folklore and Oral History*, 14 (1985), 2-9.

(26) Tuleja, "Tric or Treat," 94.

(27) Santino, *All Around The Year*, 34-36.

(28) Joel Best, "The Myth of the Halloween Sadist." *Psychology Today*, 19 (1985), 14-19; Silvia A. Grider, "The Razor Blades in the Apples Syndrome," in *Perspectives on Contemporary Legend*, Paul Smith (ed.), (Sheffield: University of Sheffield), 128-40.

(29) Jeff Brookings and Alan McEvoy, "Satanism and the Schools," *School Intervention Report*, 3 (1990), 5; James Richardson, (Eds.) *The Satanism Scare*, (New York: Aldine, 1991); Philips Stevens, "Satanism: Where Are the Folklorists?" *New York Folklore* 15 (1989), 1-49; Jeffrey S. Victor, "A Rumor-Panic About a Dangerous Satanic Cult in Western New York," *New York Folklore*, 15 (1989) 23-49.

(30) Bill Ellis, "'Safe' Spooks: New Halloween Traditions in Response to Sadism," in Jack Santino (ed.) *Halloween and Other Festivals of Death and Life*,(Knoxville: University of Tennessee Press, 1994), 25; Grider, "Conservatism and Dynamism," 4-6.

(31) Grider, "Conservatism and Dynamism," 5-7.

(32) Ellis, "'Safe' Spooks," 35; Grider, "Conservatism and Dynamism," 6-7.

(33) Santino, *Halloween*, 160-2; Sipolin 1993: 46

(34) サンティノもこうしたハロウィン体験について著書の中で自伝的に語っている；Santino, *All Around the Year*, 161.

(35) 肯定的な見解の一例として以下の文献がある；Grider, "Conservatism and Dynamism," 11.

(36) 安元正也「宗教現象と儀礼的逆転」『哲学年報』32（1973）125-49。

(37) M. Gluckman, "Zulu Woman in Hoecultural Ritual," Bantu Studies. 9 [3], (1935) 255-71.

(38) E. Ohnuki-Tierney, *Illness and Healing among the Sakhalin Ainu: A Symbolic Interpretation* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981)

(39) 伊藤幹治『贈与交換の人類学』(筑摩書房，1995)，153.

(40) Jack Santino, 1996. *New Old-Fashioned Ways: Holidays and Popular Culture* (Knoxville: University of Tennessee Press, 1996), 120.

(41) 現代アメリカ人は，ハロウィンとその起源について「人間の力の及ばない異界に存在する危険な生き物たちが活動を行うための機会」(Santino, *Halloween*, 159) との理解を有している，とサンティノは述べている。

(42) 規範の共同体である「コミュニティ」に対する，精神文化を中心とする広義の「感性の共同体」としての概念。通過儀礼の中間における「境界性」において，逆転儀礼などを伴う集団意識の高揚が見られる場合がある。詳細については，ビクター・ターナー　富倉光雄訳『儀礼の過程』(思索社，1976年)［Victor W. Turner, *The Ritual Process-Structure and Anti-Structure*, Chicago: Aldine Publishing Company, 1969］参照のこと。

(43) Turner, *Dramas, Fields, and Metaphors.*

(44) その一例として，"Here's Halloween." *Women's Home Companion*, (October 1950), 77. には，主婦向けにハロウィンに訪れる子供達のもてなし方についての記事が掲載されている。

(45) Tuleja, "Tric or Treat," 92.

(46) *Pittsburgh Business Times*, October 11, 2001

(47) Robin Wood, "The play's the thing for The Costumer," *The Business Review*, October 21, 2003

(48) Grider, "Conservatism and Dynamism," 7-9.

(49) Michael Demarest, "Halloween as an Adult Treat: An Escapist Extravaganza Outdazzling Mardi Gras," *Time*, (October 31, 1983), 110; *New York Times*, October 31, 1986; *Wall Street Journal*, October 1, 1986.

(50) Grider, "Conservatism and Dynamism," 10.

(51) Hallmark, *Merchant's Catalog* Fall/ Christmas (1991), n. p.

(52) *Wall Street Journal*, October 1, 1986.

(53) Sarah, Jeffords, "Not Just the Kids Stuff," *Business First of Louisville*, October 20, 2003.

(54) Russell W. Belk, "Carnival, Control, and Corporate Culture in Contemporary Halloween Celebrations," Jack Santino (ed.) *Halloween and Other Festivals of Death and Life*, (Knoxville: University of Tennessee Press, 1994), 110.

(55) 「ミスチフ・ナイト」は，アメリカ・ニューイングランド地方では「キャベッジ・スタンプ・ナイト」(Cabbage-Stump-Night)，ミシガン州・デトロイトでは「デビル・ナイト」(Devil's Night) と呼ばれるなど地域によって名称は異なるが，

その本質は変わらない。これらに一連の議論に関する詳細については，Russel, Ibid., 110-112; Tuleja, "Tric or Treat," 86. を参照のこと。

(56) Santino, *Halloween*, 165

(57) ISantino, *Halloween*, 159

(58) Grider, "Conservatism and Dynamism," 4.

(59) 朝日新聞1989年11月２日；1989年11月５日；1995年10月31日

(60) Barbara Babcock, (ed.) *The Reversible World*, (Ithaca: Cornell University Press, 1978)

(61) Grider, "Conservatism and Dynamism," 4.

(62) Grider, "Conservatism and Dynamism," 10.

(63) Jack Kugelmass, "Wishes Come True: Designing the Greenwich Village Halloween Parade," in Jack Santino (ed.) *Halloween and Other Festivals of Death and Life*, (Knoxville: University of Tennessee Press), 187-217.

(64) Kugelmass, "Wishes Come True", 212.

(65) 「道化」とは，通常は社会的な権力を握る「中心」ではなくあくまでも「周縁」に身を置く存在である。祭りなど過渡的な状況で社会的な演技特性を発揮し，周縁と中心を取り結ぶことで，社会基盤を活性化する。詳細は，山口昌男『道化的世界』（筑摩書房，1975）を参照のこと。

(66) Santino, *Halloween*, 34-6.

(67) Claude Lévi-Strauss, "Le Père Nöel Supplicié," *Les Temps Modernes*, 77 (1952), 1588.

(68) Santino, *All Around The Year*, xvi